第57回「おかねの作文」コンクール

秀作

ただあるだけのお金

大阪府・大阪教育大学附属池田中学校　3年　王　雨溪

私は節約が好きだ。そう言うと友達には驚かれるが、嘘(うそ)ではない。貯金する時の、お金が「増える」楽しさとは違う。お金が「減らない」楽しさだ。

例えば買いたいメモ帳があった時、私はまず、家にあるメモ帳の数と用途を確認する。それらとかぶらない使い道が存在するのか、確認するのだ。買った後、どういうことを書く時に使うのか、具体的なイメージが湧かなければ買わない。そうして買うのを諦めた時、その分浮いたお金を想像して心が弾む。逆に何かを買った時は、減ってしまったお金を想像して罪悪感が募る。そういう、「節約が好き」だ。

昔からそうだったわけではない。親が何でも買ってくれて、「ほしい」と言えば自動的に物が与えられた。金遣いは荒く、買いたい放題だったものだ。しかし中学に上がる頃に、段々気がついた。どれだけ物を買っても、本当に使っている物はごく一部。買い物は「お金」と「物」との交換であるはずなのに、お金は減る一方で、使っている「物」は、実質増えてはいない。その虚しさを学ぶと同時、私は、「お金を使わない」ことの楽しさに目覚めた。

ケチだね、と親に言われた時、目から鱗(うろこ)が落ちた気分だった。ケチであるということに対して、窮屈で陰鬱としたイメージを抱いていたからだ。けれど実際、節約はそういう行為ではなかった。お金が無駄に減ることもなく、加えて充足感や高揚感をも得ることができる。一石二鳥だと、私はこのささやかな趣味に満足だった。

反面、その課題にも徐々に気づき始めていた。つい先日も、それを痛感したばかりだ。

ある日、いつものようにコンタクトレンズを装着すると、右目のかすかな違和感に気がついた。異物感をはっきり感じる上に、少しじんじんする。しかし、ワンデーなのでつけ直すのははばかられるが、新しく開封するのはもったいない。

©J-FLEC2024

違和感には気づかなかったふりで放置していた。しかし異物感はなかなか消えず、それどころか、じんじんした痛みは段々勢いを増している。耐えきれず親に相談すると、「新しい物を使えばいいじゃない」とあっさり言われた。もったいないと抗議すれば、「それで目に傷がついたら、治すのにもっとお金がかかるよ」との返答。なるほど、それは考えなかった。早速取り替えてみると、あれほど不快だった違和感が、拍子抜けするほどきれいに消失したではないか。

適切な使い方をすることで、お金は確かに価値を生む、ということを学んだ。

前述の通り、私は節約を「楽しい」と感じている。そして楽しいのであれば、そのままのお金の扱い方で良いではないか、とも思っていた。それでも作文という形で、お金の使い方について考え直したことには理由がある。大人になった時、このままでは困るのではないかと、最近思い始めたからだ。

今私が「お金を使わない」という選択肢を選び続けられているのは、本当に買うべき物が特にないからとも言える。逆に言えば、本当に買うべき物、つまり生きるために必要な物は、大人である親が買ってくれている、とも。そして私も、いつかは大人にならなければいけない。その時、お金を正しく使える力は、生きる力に直結すると気がついた。

私事だが、最近英文法辞典を購入した。今まで、わからないことはインターネットの断片的な情報を拾い集めていたが、正確かつ体系的な情報を一覧できるようになり、英語学習への意欲が増したのを感じている。良い買い物をした。

自分が本当に必要としている物を見極める力、そこにお金をかける勇気を、これから少しずつ養おうと思う。お金を、ただ手元に置くためだけのものではなく、人生を豊かにしてくれるものにするために。

©J-FLEC2024